

第9回桃山学院大学図書館書評賞受賞作

【優秀書評賞】

大草 みどり(法学部1年次生)

野中 猛『心の病:回復への道』 岩波書店 2012年

【佳作】

井窪 あやみ(経済学部3年次生)

加地 倫三『たくらむ技術』 新潮社 2012年

書評とは「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

<募集要項>

- 応募資格** 本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後5年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
 - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
 - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
 - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 募集期間** 2014年4月28日(月)～9月30日(火) ●**入選発表** 2014年12月3日(水)
- 授賞式** 2015年1月14日(水) ●**応募点数** 39点

【総合講評】

図書館長 法学部教授 瀧澤 仁唱

「本は知識の宝庫」などと昔から言われてきた。しかし、すべての本がそうとは限らない。「羊頭狗肉」の本もあれば、羊頭もないスカスカのものもある。発信力がものを言う時代なので、内容がなくても宣伝がうまくかたり、目立つものがよく売れる場合もある。インターネットではアクセス数がものを言うので、「数」だけ増やすための方法も編み出される。限られた人生で良い本にあたれば、長年つちかった先人の知恵を自分のものにできるが、下らない内容の本では、時間の無駄になる上に誤った知識を植え込まれかねない。読むべき本を選ぶことの大切さは言うまでもない。そのために書評があり、書評はいわば「道しるべ」である。

しかし、書評は「道しるべ」だけでなく評された本をさ

らに高みにもっていくためのものでなくてはならない。書評をするには、まずその本にどのような内容が書かれてあるかを理解する必要がある。理解したら感想がわくけれども、さらにその感想をもとに、その本をさらによい本にするにはどこをどのように変えていくべきかを考え、記す必要がある。この水準にまでいたらない書評は、感想文に近く、真の意味の書評とはいえない。そこには本や著者への尊敬が必要であり、ネットに見られるような揶揄や揚げ足取りであってならないのはもちろんである。ただ本の内容を理解するといっても、理解しようとする意欲と理解する能力がないと理解できない。そのためには読者の日頃の研鑽も必要である。

以下、やや辛口な表現をお許しいただくとして総合講評を述べる。

今年の書評応募点数は39点で、昨年の42点よりさらに減った。応募フォームが整っていないもの、書評する本が出版後6年以上たっているものなどで審査

対象外になったものが 16 点あった。内容が良かったものもあり、惜まれる。入選は、昨年は佳作 1 点であったが、今年度は優秀書評賞 1 点および佳作 1 点であった。選考にあたった図書館委員の意見をおおまかにまとめれば、応募された「書評」の多くは本の紹介に過ぎなかったり、単なる感想文であったりしたものも多かった。一応書評といえそうなものについては、ネット社会で横行している剽窃はないかなどを点検した。これは図書館事務課員の点検作業によるところが大きい。最終選考では、応募された「書評」とその本の内容を逐一照らし合わせ、内容が妥当かどうか図書館委員が点検し、授賞すべきかどうかさらに検討した。

優秀書評賞となったのは野中猛(のなかたけし)『心の病:回復への道』(岩波書店、2012 年)である。これは、精神科医の著者(故人)が、医師となって成長していく過程を縦軸に、精神医療に関わる制度の歴史、現状、諸外国と日本との比較、精神障害者の医療および福祉と今後について、非常にもりだくさんな内容をかなり簡潔にまとめて新書にしたものである。著者の人間一般に対する深い愛情に裏打ちされた記述があちこちに見られ、初学者への本であると著者は記しながら、読者の能力により、極めて多くの示唆に富む本となっている。新書でありながら、読み手の能力でいくらかでも深い理解の得られる本である。評者がこれに気づいたかどうかはわからないが、良い本を選んだと思われる。

優秀書評賞となった書評を読んでも、単に書評を書いただけでなく、この本の紹介などを参考にしているようであるけれども、それに引きずられてはいない。本の内容紹介の分量を書評原稿の半分以下におさえ、さらに自己の見解をきちんと展開している。底本の章立てがしっかりなされているため、まとめやすかったとしても、本の内容紹介で原稿の大半を費やしてしまうような「書評」が多かったのに比べて、群を抜いた書評であったといえる。著者の意見に対して評者が賛否を述べているのは書評としては面白いけれども、その本の内容を深めていくという点ではやや物足りなさを感じた。そこを克服するのは至難の業であるかもしれないが、それができていたならば「最優秀書評賞」となった可能性がある。

佳作となった加地倫三(かぢりんぞう)『たくらむ技術』(新潮社、2012 年)は、その書名のインパクトからすると、視聴率さえとれば良いとして作られる、人気お笑い番組(その賛否は問わないが)ディレクターの本(著書というより、口述筆記を思わせる)だと思って読んでしまいかねない。読み始めて、思ったとおりの下らな

い暴露話だと思っていたが、読み進めていくうちに、それが極めて表面的な読み方だと気づかされ、これが著者の本当の「たくらみ」だったのかもしれないと思うにいたった。お笑い番組でも視聴者を傷つけたり、不快な思いをさせないように著者が細心の注意をはらい、出演者だけでなく番組作りに関わるスタッフ全てに尊敬の念をいっていることを思い知らされた。ほとんど芸のない人間が下らない「楽屋話」をだらだらとしゃべりしているだけの番組を著者が作ってきたかと思っていたら、実はその芸人がしろうとでは想像もつかない努力をし、並はずれた能力の持ち主であることが分かった。そのような内部事情を知らずに表面的な批判をすべきではないとこの本は教えてくれた。

同書の書評は、内容紹介に苦労の後がみられる。底本自体の章立てが必ずしも理路整然としているわけではないからである。そのため、書評部分がやや不十分となったため、残念ながら佳作の水準にとどまった。表現方法や文の作成にも荒さがあり、評者の今後の精進を切にお願いしたい。

最後に今年度から書評賞の応募者に学生(大学院生を除く)に加えて社会人聴講生および市民利用者も含めることにしたことについて述べておく。より多くの方々が応募しやすいようにしたけれども、今年度の市民利用者からの応募は極めて少なかった。私は、学生以外の応募者が優秀作となり、学生の書評が排除される可能性を危惧した。ラグビーの学生王者と社会人王者が最後に日本一を競うために毎年闘ったけれども、社会人王者が圧倒的に強くて試合にならなくなり、決定戦方式を変えざるをえなかったことが私の頭をよぎった。しかし、今年は杞憂に終わった。今後どうなるか注視したい。



【 優秀書評賞 】

野中 猛『心の病:回復への道』

大草 みどり (法学部1年次生)

私は野中猛『心の病 回復への道』(岩波書店 2012年)についてとりあげたい。現在、一生のあいだに精神疾患にかかるのは4人に1人といわれ、避けては通れない問題である。なぜ人は心を病むのか。どのような対応が適切なのか。そういった素朴な疑問を本書は身近な具体例とともに解説している。

著者の野中猛氏は、津軽の精神科病院で研修医として出発し、東京で実践を積み、さらに埼玉県に転身した。発症予防、相談・診療、そしてリハビリテーションまで、地域全体の精神保健をカバーする取り組みにかかわる。そして、その後は日本福祉大学教授として、人材の育成に携わった。また、ケアマネジメント技術の伝道者としての顔もある。本書は、そうした豊富な経験に基づいて、さまざまな視点から書かれている。

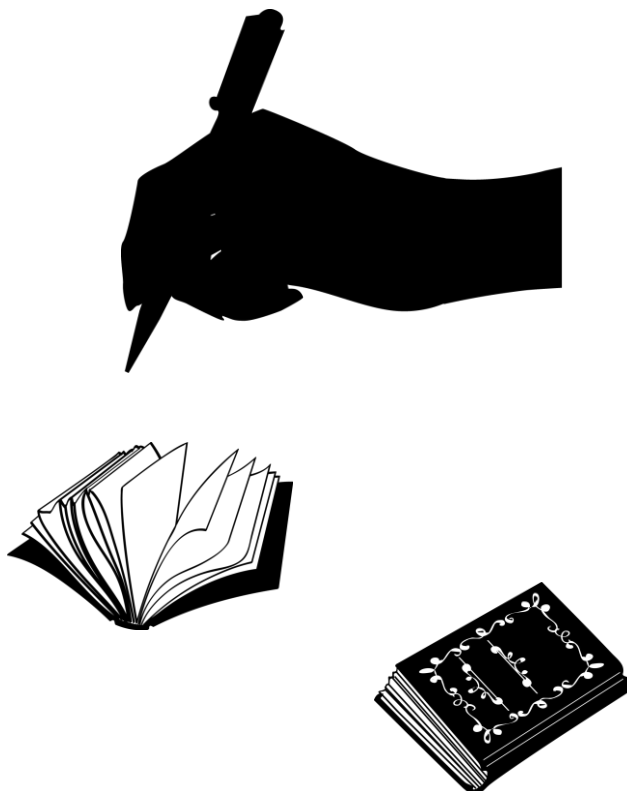
本書は6章で構成されている。第1章ではWHOのデータなど複数の事例を提示して、精神保健の大まかな全体像を書いている。第2章では、座敷牢や「相馬事件」の話を例に挙げ、過去から現在の精神医療に至るまでの歩みについて述べている。第3章では、精神疾患にかかった際の症状について整理し、対処法等、実用的な情報を紹介している。第4章では、精神疾患の後遺症が残る場合に、どのようにリハビリテーションしていくのかについて具体的な事例を通して紹介している。第5章では、著者の体験に基づき、世界的な視野から精神疾患の有り様や精神保健制度を見渡している。第6章では、ここまでの章をふまえて現在の状況について述べている。

著者の意見で私が賛成したいのは、義務教育場面で精神保健に関する知識と対処法を教えるということである。冒頭で述べたように、もはや精神疾患は誰にでも起こりうる問題である。さらに、中学から大学にかけての思春期青年期は、精神疾患が最も発生しやすい時期である。ただでさえ、曖昧で不安定な時期になんらかの精神異常が起きれば、当人は混乱してしまう可能性がある。そのときに少しでも知識があれば、病院へ行くなど適切な対処ができるであろう。また、著者は精神疾患の回復のためにはチームワークが大切だと言っているが、やはり精神疾患というのは偏見が多い。偏見があればチームワークといってもうまくいかない。その偏見をなくすためにも学校教育等で教え、

理解を促す必要がある。

一方、著者の意見で私が疑問に思うことがある。支援困難な事例の場合、ひとつのサービスや、1人の専門職だけでは、一家全体の問題を解決しにくいと、家族構成員それぞれを支援するチームを結成する必要がある、家族それぞれの実態を把握するためには、その家族だけでなく親戚筋や友人からも情報収集を行う必要があると著者は述べている。しかしこれは、なかなか難しいのではないかと思う。まだまだ精神疾患についての世間の理解が少ない分、好奇の目で見られる可能性も全くないとは言い切れない。そのような状況で、家族は支援を受けることを快く承諾するのか。それが疑問である。

以前、私が友人と話していたときに、友人が躁鬱病について知らないと言ったのでとても驚いた。確かに、私たちは精神疾患について学習する機会はほとんどなかった。まだ、精神疾患についてよくわかっていなかった時代、差別や偏見があったのだから、やはりよくわからない、知らないということは、直接的ではないにしろ差別や偏見に繋がる可能性があるということだろう。そういった点をふまえ、やはり義務教育等で学ぶ機会を設ける必要があると私は思う。これからの精神保健の活動が進展するには、精神保健についてあまり関係のない人たちが、どれだけ関心を持つかどうかにもかかっているだろう。本書は、その役割を果たす一助となるはずだ。



【佳作】

加地 倫三『たくらむ技術』

井窪 あやみ(経済学部3年次生)

この本は「アメーーク!」「ロンドンハーツ」といったテレビ番組プロデューサーの加地倫三氏が初めて書いた本であり、著者が自身の体験や経験を踏まえながら、自らの考えを綴ったものである。さらにテレビ番組内の様々なヒット企画の裏にある「たくらみ」がたくさん書かれている。「たくらみ」とはふつう良い意味で使われる言葉ではないが、この本では「狙い」に近い意味で使われている。また、随所に著者の経験が書かれており、就職活動面接時での著者の様子や態度、入社後の他部署で得た経験やADと略されるアシスタントディレクター時代の苦労や仕事に対する意識も書かれている。

1・2・3章は番組に関するたくらみ、企画、会議について書かれている。著者は周囲の人に中傷されてもテレビ視聴者のことを第一に考えた番組作りを行っている。また、「企画は自分で生まなければ良い番組が作れない」と言い、さらに会議をする上での極意が書かれている。

4章は物事の成功と失敗について書かれている。番組はヒット企画を毎週やれば、結果はそれなりに視聴率に反映される。しかし、そのヒット企画が一気に飽きられてしまえば、余裕のない状況で打開策を考えなくてはならない。だからこそ余力があるうちに次の準備をしておかないと、成功していても失敗に陥ってしまうと述べている。

5章は文句や悪口にこそ成功に導くヒントがあると書かれており、人間は褒められることは嬉しいが、その時だけの満足感であり、むしろ怒ってもらえてありがたいと思うべきだということが書かれている。

6・7・8章は番組の作成時と収録時、編集時の注意点が書かれている。著者はネット上の文句を真に受けたり、配慮をして損する人を作らなかつたり、人の生死をネタにしないなどの独自のルールを持っている。段取りは大切だがアクシデントに対応できないと通用しないとする。また悩むのもただ悩むのではなく、脳をリフレッシュし良い状態で悩むことが大切であると述べられている。9章には企画書を通す際のコツが書かれている。

10・11章は人間関係や積極性について書かれて

おり、まわりの人にかわいがられた方が得であるという著者の考えをお笑い芸人のかわいさを例に書かれている。更に積極性があるこそ、仕事が成り立つと書かれている。

12章は著者が担当しているバラエティ番組の面白さの作り方が書かれている。

13章はお笑い芸人のたくらみについて書かれており、最終章の14章には「たくらみ」について書かれている。

私がこの本と出会ったきっかけは自分の好きなテレビ番組に携わっている人が書いた本ということであったが、読み始めると、続きが気になって仕方がなかった。この本は14章からなり、各章は3から7の節からなり、全ての章一節にタイトルがついているため、全て読むのはもちろんのこと、読む章と読まない章があっても、話が理解できるようにつくりになっている。また、それぞれを違う機会に読むとしても、前で言っていたことが詳しく書かれていることなどの工夫がされているので、普段読書をあまりしない人にとっても読みやすい本である。本節中のタイトルは、「会議は短い方がいい」「しごとは自分から取りに行け」などわかりやすく端的に書かれていて、仕事をする上ではあたりまえの事であるが、本書を読むことで、改めてそのように感じることができた。また「勝ち続けるために負けておく」「文句や悪口にこそヒントがある」という節では、今まで自分がそう考えていなかったところまで学ぶことができた。更に、著者は常に分析的に物事を考えており、自分にはない部分を知る機会になった。

この本は仕事をする上で頭に入れておかなければならないことが書かれている仕事のやり方の本だと考える。著者のマスコミ業界での経験を例に裏話をういて書かれているが、マスコミに関わらずどの業界でも通ずることがあると感じる。この本はたくさんの人に読んでもらいたい本であり、もっと話題作になるべき本である。人気番組を手がけるプロデューサーであり、本をあまり読まない若者にとっても読みやすい本である。そのためこの本のカバーを、原色を用いて印象を残すような工夫が欲しいと感じた。そのため、新書ではなくビジネス書として刊行されるべきだったと考えた。私は就職活動をする前にこの本を読んでよかったと思っている。この本をぜひとも同年代である大学生に読んでほしい。

